南会津町　K・N

平成16年 1月8日(木) 午前6時30分　第1子 男児出産　2,990g

この私もとうとう、出産。とうとう、中嶋助産院で出産。
小さな頃（というより産まれてすぐから）お産の現場で育ち、見て、聞いてきたことが、実際に自分の身に起きてしまった。それが不思議であり、また当たり前でもあり、特別なことでもあった。
"お産" 私にとっては身近なものだったような気がするが、実際に自分が妊娠し、いざお産という~~ものを~~ものを考えた時、とても未知な世界で出産予定日が近づくにつれ、恐怖さえ感じていたのだ。本当に、臨月に入ってからは恐怖心しかなかった。皆、ママになるのが楽しみ！とか早く陣痛が来ないかな…とか考えている人も多いけれど、私は全く楽しみに思えなかった。もう、今まで10ヶ月間の妊娠を白紙にして、何でもない普通の身体に戻りたいとさえ考えた。
なぜだろう？
私は、この1ページの2番目に書いている"美知子"（みっちゃん）とは従姉妹同士、初代おミネさんの孫、そして小林康乃先生は伯母に当たる。そして、ここで働いている皆が書いている"千ヨさん"は私の母親。
中嶋助産院はこの場所に来る前に田島町の中で2回、場所を変えている。
私は西町（田島町の人は分かるね）の中嶋助産院の時、そこで産まれた。
母親は当時の県立病院に看護婦として勤務していた所、父親と出会いこの中嶋へ嫁いできた。母親が病院を辞め、助産院の仕事を朝から晩までサポートしていた為、私は産まれてからずっと助産院で育ち、"お産"の音（声）を聞いていた。
産婦さん達の叫び、悲痛な叫び、この世の終わりのような叫び、何度聞いただろう。
お産が始まったというと家の中にとたんに緊張が走り、皆バタバタする。何かすごい大変そう、痛そう、あんなに叫んで、身体は大丈夫なのだろうか？嫌だ、コワイ、コワイ、……
お産は大抵夜に多くて、母親が手伝う時などは私も一緒に産院に泊まる。
産婦さんの絶叫が怖くて耳をふさいで布団に入っていた。
でも次の瞬間……オギャーッと元気な赤ちゃんの声。ああ良かった産まれたんだ。
赤ちゃんの産声がまるで天使の声のような気がしてなんともいえない幸福感、安心感に変わり、私もスーッと眠りについた覚えがある。
お産が昼や夕方の時は、廊下で家族や旦那さんらしき人が心配そうに腕をくんで堅い表情で待っていたのを思い出す。昔は旦那さんが立ち合うということはそんなに一般的ではなかったように思う。
こういった緊張感や絶叫を聞き過ごし、自分が妊娠するまでは深く考えたことも

無かったけれど、いざお産という時に"お産"そのものに恐怖心を抱いていたということが初めて分かったのである。お産が身近だったから安心、という訳でもないのだな、と自分のこんな気持ちを改めて面白いと感じた。

5ヶ月目に入る頃、それまで住んでいた所の病院で診てもらっていたのだが、因島に帰ってきたついでに中嶋助産院でも一度診ておいてもらおう、と来た。その時康乃ちゃんに自然分娩をした人の手記と他何冊か本を借りて行った。自然分娩と言っても、ただ、病院で行う医療行為を排除したとか、それどころではない本当の本当の、誰の手も借りない"一人で産む"ということをやった人の本だった。その人は、徹底している。自家用で野菜その他を作りたくて夫婦で田舎に移り住み、本当に無農薬、有機栽培のものを食べ、研究し、もちろん病院や産院に健診にも行かず、自然の力だけを信じ、とうとう最後は一人で、本当に独りで自宅で産むのだ。衝撃的だった。"お産"というものは必ず誰かに立ち合ってもらい、"とりあげてもらう"ものだと思っていた。この人の例は極端だと思う。私はこんなに強くないし、ここまで物事にこだわることはできない。でも、その本の中にもあった、動物だって本来は母親一人で巣を作って産むのだから、人間だって出来ないことはない。と。自分には一人で産むなんて恐くて出来ないことだけど、お産は本来自然の力だけでできるものだということは、その本を読んで学ぶことができた。そして、それをサポートするのが助産院なのだな、ということも改めて思った。

そして、皆さんがよく病院と助産院を比べて良い悪いを出したりしているけれど、病院の産婦人科で産む、ということと助産院で産む、ということは基本的に違うものであり、比べるものでもなく、良い悪いをそれぞれにつけることは出来ないと思う。

病院の方が安心と思う方は病院で産めばいいのだし、助産院の方が安心と思う方は助産院で産めばよい、それだけである。基本的に母子共に健康で妊娠経過も順調、という条件が助産院ではあげられるが、昔から母親の話を聞いたり、おばあちゃん、康乃ちゃんの話を聞いたりしても結構難産といわれるお産も助産院で何事もなく出産できていたりするのだ。一例が逆子であるが…今は逆子だとすぐに帝王切開になるそうである（そうしなければいけないらしい）昔はおばあちゃんなんか（よっちゅう、「今日は逆子だった」とか言った気がするが、昔は良くてどうして今はお腹を切らなくてはいけないのだろう？助産師さんたちが本来できることを色々と医師会の方で制限してしまっている、医療行為はしちゃいけないとか（助産師さんたちだって看護婦として何年も勤務し、それからお産を"専門に"勉強して更に助産師という免許を取ったいわゆる本当にエキスパート(?)なのだ。注射だって何だって、本当はそういうことをする知識も腕もあるのだ。なのにしてはいけないって…）

だから「万が一の時のことを考えて病院を選ぶ」という人がいるのだろうと思う。
それはそれで良いと思う、ただその病院と比べられて「助産院は不安だ」というのはどうだろう。
先ほども書いた様に、私は病院と、助産院の在り方、存在の意味は違うと思っている。
万が一、万が一、と言っていたらキリがない。どんなに健康なんでも"万が一"はあるのだから。
その"万が一"の為に、そこに重点を置くお産を考えているのであれば病院が良いのであろうと思う。
"安産なんだ"という心構えで自分の力と赤ちゃんの力だけで産む、それを手助け、少しだけ手を添えてあげるのが助産院。病院はある程度、病院の都合や状況に合わせさせられる。
助産院は基本的に"産む人"の都合や状況を見守り、そのペースに合わせる。主役は自分。
受動的お産がしたいのか、能動的お産がしたいのか、それをよく考え、見極めて選ぶべきなのではないかな、と思う。私は環境が環境だったので当然の様にここに来たが……。
病院だって悪くない。それが「病院のお産」なのだから。
助産院だって悪くない。だって これが「助産院のお産」なのだから。

話は戻るが、私の出産前の不安や恐怖というのは「産む」という行為そのものに対してではなくて陣痛に対してだった。痛いんだろうな…どの位痛いんだろう、そのまま気絶しちゃうかも…
立ち合う人は康乃ちゃんと母親と分かっていたので、お産の現場そのものには何の不安もなかったのだが、自分が陣痛というものに耐えられるのか、それだけが私の中でグルグルうずを巻いていた。
最終的には、主人が仕事休みで丁度田舎に来ていた時に陣痛がはじまったので、主人も立ち合う事となった。おしるしがあって、夜11時康乃ちゃんに内診してもらうが、まだ、ということで雪の中一度実家へ戻る。ところが、帰ったとたん、どんどん痛みが強くなり寝ても立っても いられなくなった。
定期的に来る重〜い生理痛のような痛み、5分おき。もう笑顔もでない。母親に腰をさすってもらう。このまま痛みが増したらもう動けないと判断し、母親と入院。外は大雪。
内診から帰ってきて入院する午前2時半の間に、あっという間につもってしまった。まだまだ降りそうだ。
一室で陣痛に耐えている所で康乃ちゃんを呼ぶ。でももう、どの位の時間に来たのかも分からない。
だんだんますます強くなる痛みに、絶叫せずにはいられなかった。寝たり、四つんばいになったり、どういう姿勢をとったら一番楽なのかよく分からない。でも、自然に四つんばいになるのが多かった。
これから赤ちゃんが出ようとしているんだ、私も頑張らなきゃって思っても、もう耐えられるような痛みではなかった。自分が、赤ちゃんになって羊水に入ってフワフワしている、そんな浮遊感を覚えた。陣痛の合間に、横で康乃ちゃんと母親、主人の話し声が聞こえてくる。それが、膜一枚はさんで、(というか水中で音を聞くような)その外側で囁いてるような感覚なのだ。

会話の内容は把握し、それに答えたいと思うのだけど、また陣痛が押しよせてくる。
自分は別世界にいるみたいだった。
4:30 破水、車いすで分娩室へ。あまりの痛みにもう何がなんだか分からない、押しよせる力にまかせてあとはいきむしかなかった。どの位いきんだのか、6:30 産声を聞いた。
胸の上に乗せられた小さな小さな体。本当にさっきまでお腹の中で動いていたあの子が、この子だろうか？信じられなかった。小さなひとつの生命の誕生。なんて感動的で、なんて神秘的なのだろう。小さな体で一生懸命泣いている。息をしている。
※不安の文字だった陣痛は、想像以上にやはり辛いものだった。もう二度と経験したくない、と思う程。
とにかく下のお腹が痛かった。それと妊娠中からずっと痛かった右側のじん帯。これがハンパじゃなく痛かった。腰が、全くといっていい程痛いと感じなかったのは、もしかしてずっと康乃ちゃんなり母親がさすってくれていたせいなのだろうか？それさえも分からないほど腰の痛みは無かった。
本当にさすってもらった為に痛みを感じなかったのであれば、まさしく"ハンドパワー"だ。魔法だ。

お産は、本当に本当に貴重な体験だった。人生の中でそう何度も無い、すばらしい出来事だと思う。
結婚してすぐの頃は、子供なんていらないと思っていた。自分の時間は奪われるし、自由が無くなる、子供の為に人生の一部の時間を割かなくてはいけないなんてまっぴらだと。
でも実際、産まれてきてこの数日間、オムツ、オッパイ、数時間ごとに泣くし、確かに自分の時間は減ってしまったけれど、赤ちゃんと接する時間の方が大切だし、大変だけど、自分から進んでその大変さも受け取めようという気持ちがあることに気付く。かわいい顔を見てると、この子の為なら少し位自分の時間が減ったって仕方ないな、―― あんなに自己中心的だった自分の変化。これが母親の気持ちなんだろうか。
二十歳くらいになったらもう彼女なんかできて母親の存在なんか疎ましくなるんだろうな、いつかは離れていってしまうのだろうな…… そんなことを今から考えて淋しむ仕末。
離れてもらはなくては また困るのだし、それまでは、この子との一緒の時間を大切に、大切に過ごさなくては、いっぱいいっぱい楽しい思い出を作って、精一杯愛情を注いであげなくては、と思う。
この子が産まれた朝、外は一面銀世界、まっ白だった。雪と一緒に天から舞い降りてきてくれた様な、そんな気がした。聖なる子、そんな気がしてならない。"聖"には冬という意もあるので、名前には聖の字を入れた。"一聖"
康乃ちゃん、ママ、本当に素敵なお産を経験させてくれてありがとう…そして(天国の)ミネおばあちゃんにも。

④ H16(2004).1.22. Kumi